http://decfamily.p1.bindsite.jp/2014/

We 35R

No.445　15/03/05

変わることを恐れずに・終わるまでの時間を大切に

今日が最後の登校日で、月曜日がいよいよ卒業式である。卒業式は、ある意味まとめの「行事」であり、まとめの「儀式」であるといえないこともない。儀式の時はきっちりやろうというのがこの学年の方針だったし、もちろん、行事には全力で取り組むのが日比谷生である。ぜひ、しっかりとした態度・服装で式にのぞみ、日比谷での生活のまとめにふさわしい、厳粛かつ品位を感じさせる卒業式にしよう。

＊

この通信もいよいよ最後である。昔書いたことを読み返すと、我ながらなかなかイイことを書いているなぁと思う（自画じーさん）のだが、結局私の言いたいことは大筋において二つのことなのである。その一つは、「変わることを恐れるな」ということである。

ダイヤモンドのコマーシャルに「ダイヤモンドは永遠の輝き」というのがあって、永遠であること、変わらないこと、変わらぬ信念に生きること、みないなことはプラスの価値を持つように思われているのではないだろうか。そういえば「永遠の愛を誓う」みたいなフレーズもあるし、「巨人軍は永遠に不滅です」というのもあった。

しかし、私は「永遠に不変であること」をあまり重要だとは思わないのである（この「重要だとは思わない」という考えそのものも、そのうち変化するかも知れないが…笑←いわゆる「脱構築」ですな）。むしろ、いろいろなことに、柔軟な姿勢で臨むことの方が大切なのではないだろうか（特に若い時には）。「自分はこういう人間だ」「こういう信念に生きる」などと決めつけずに、信頼できる友人や尊敬できる先達を見つけながら、常に新しい見方・考え方に開かれた感性を持ち続けてほしいと思う。

二つ目は、「何事もいつか終わりがくるのだから、それまでの時間を大切にしよう」ということである。これは、卒業を控えた今ならきっと分かってもらえるはずである。

入学式の時には、卒業式のことなどまったく意識しなかったに違いない。しかし、時間は確実に流れ去って、もうすぐその瞬間を迎えようとしている。決して、日比谷での生活を取り戻すことはできないし、もしかしたら、もう生涯にわたって合唱や体育祭や演劇に関わることのない人だっているに違いない。一生、古典には触れない人もいれば、積分記号にお目にかかることのない人もいるだろう。もちろん、そんなことはちっとも悲しくないと強がっても構わないが、何事にせよ、何かが終わってしまうことの意味を、もう一度考えてみてほしい。

黒澤明監督映画に「生きる」という名作がある。病気で余命わずかであることを認識した主人公が残りの日々を精一杯生きる姿と、その人の葬儀の場ではその姿に共感していたはずの人々が、翌日にはもう日常のルーティンの中に埋没していってしまう姿が描かれている。余命が宣告される、つまり「終わり」が明確に設定されて初めて生命が輝きを持つという逆説がそこにはあるわけだ。

何事にも終わりはやってくる。その時、終わったことを素直に受け入れて、次に向けた新たなスタートを切るためにも、終わるまでの時間を充実させることが大切だと私は思う。これからの日々を、そんな気持ちで過ごしてほしい。